

『十年誌』の編集を終えて

松枝 到 『十年誌』編纂委員長

昨年まで研究所の委員をしており、そのおり『十年誌』の計画が持ちあがり、委員としての任期は終えることになっていたのだが、この特集の編集長をしてくれないかという意見があった。もともと編集者をしていたこともあって簡単に引き受けてしまったが、これはとんでもない誤算だった。というのも、その後になって学部長に推されてしまい、しかも学部改革という宿題つきだったので、信じられないほどの仕事量のなかでの編集作業となってしまったからである。しかし、後悔先に立たず。やるほかなかった。

とはいうものの、その「前史」をふまえた研究所10年の歴史を掘り起こす作業は、所長が前文に書いているように、きわめて困難なものだった。そのうえ、研究所の創設に関わった人々に話を聞く必要もあり、とりわけ研究所の前身となる「共同研究機構」を立ちあげ、初代研究所長となった杉山康彦先生にお話を伺いたいと思っていた。しかし、ご病気のためそれもままならず、お嬢様のご協力を得て、ようやく聞き書きによる貴重な文章をいただいたものの、はからずもそれが先生の絶筆となってしまった。杉山先生は、2005年9月30日に亡くなられたのである。この場を借りてご冥福をお祈りしたい。

そんな次第で、学園の歴史についての文献はあるものの、大学の「正史」がない状態で（ただ「外史」はある）史料を収集するについては、研究所助手の内田正夫さんや学部事務室のご協力を得ることができ、どうにか主要な部分の歴史と基礎的な資料をなんとかとりまとめることができたと思う。しかしまだまだ遺漏の多いことは承知しており、この『十年誌』は基礎作業にすぎないと自覚するものである。より充実した「歴史」については今後にゆだねたいと思う。

したがって、この『十年誌』は「歴史」ではなく「歴史への手がかり」である。だが、この特集の成立にあたっては、じつに多くの方々にご協力・ご執筆いただき、研究所への思いの深さに感銘する思いである。ありがとうございました。

もちろん本「誌」の試みは、今後の研究所のあり方にたいする提言でもあって、ご意見・ご批判を待ちたいと思う。10年後には創立半世紀を迎える本学は、この提言をどう受けとめるか、注目しているところである。

（まつえだ いたる）